

連結詞的知覚動詞構文の不定主語に於ける意味制約

中村文紀 (慶應義塾大学大学院)

1. はじめに

本稿では、連結詞的知覚動詞構文 (Copulative Perception Verb Construction、以下 CPVC) の不定主語に於ける意味制約に関して前提となるデータを提示することを目的とする。具体的に問題となる例文は以下のようなものとなる。

- (1) a. Ants look weak and fragile.
 b. *Ants are looking weak and fragile.
 c. The actors were looking handsome during this play.
- (2) a. A man looks happy.
 b. *A man is looking happy.
 c. ?The actor was looking good during the play.
- (3) a. ?Many men look busy.
 b. Many men are looking busy.
 c. Many men looked busy.
 d. Many men were looking busy.

(1)は裸複数名詞句 (bare plural) の例であるが、CPVC の文全体の容認性は不定主語かどうかもしくは進行形かどうかそれぞれ単独の問題ではなく、それぞれの要因が相互に関わっている。それ故 CPVC の容認性を説明するためには含まれる要因を洗い出した後それらを体系的に組み合わせて調べる必要がある。本稿では不定主語を基軸として、3つの項目 (時制、相、形容詞補語) の組み合わせを調べることで CPVC の解明を試みる。

2. 連結詞的知覚動詞構文

CPVC は英語において義務的に補語をとる知覚動詞構文であり、典型的には *look*, *sound*, *smell*, *taste*, *feel* の五つの知覚動詞に現れる。

- (4) a. Gandalf looked old and careworn.

- b. That sounds like a bit of old Bilbo's rhyming.
 c. Something smells burnt.
 d. The bread tastes almost as good as it did last night.
 e. ...it did not feel either cool or warm in the mouth.

(J. R.R. Tolkien, *The Lord of the Rings*)

義務的補語は必ず主語の属性ないし状態を叙述する、典型的な連結詞 *be* と同じ機能を有しているためにこう呼ばれる。その為 CPVC は典型的には Kuroda(1991)のいう *categorical judgment* を表すと考えられる。なぜならば主語と動詞句は主題と叙述というそれぞれ別の機能を有している。これがどう言語化されるかということに関して今野 (2009) の中間構文の議論を援用すれば、*categorical* な文の場合主語がはっきりと聞き手に理解可能であれば英語においても明示しなくてもよい。CPVC でも同様の現象が見られる。

- (5) a. (ある提案に対して) Sounds good!

- b. (漂ってきた香りに対して) Smells nice!

それゆえ *categorical judgment* であるということが言える。

従来 CPVC は主に知覚動詞の特別な用法として捉えられており、先行研究も動詞やその項構造を中心に行われてきた (Rosebaum, 1967; Rogers, 1972; 本多, 2005; 谷口, 2005; Jackendoff, 2007)。ここでは動詞句全体としては状態動詞として扱われており、その為進行形とは折り合いが悪いとされている。しかし多くの例文を集めていくうちに必ずしもそうでないことが明らかとなった。例えば (2c)などは母語話者間での容認性の揺れが確認された。全く問題がないという母語話者と進行形だ

からという理由で不適合であるという母語話者がいた。故にアスペクトも考慮しなければならない。

これまでの先行研究は、上記のように動詞に焦点を当てていたが故に主語にどのような制約がかかるかどうかということに関して説明しておらず、例文の主語位置に例外なく定性の高い固有名詞や the + 名詞を用いている。更に主語と補語にかかる制約について言及しておらず連結詞 *be* と同じであると考えている。例を挙げれば、谷口 (2005) では主語と補語との関係が明白であれば主語と補語にかかる制約は存在しないとしている。しかし主語と補語との関係が同じであっても容認性には差が生じるため研究の余地を残している。

3. 不定主語とその他の文法範疇

3.1. 不定主語

本稿では不定主語として以下の3つを扱うこととする。

- (6) a. 不定冠詞 a + 単数可算名詞 (e.g. a man)
- b. 裸名詞句 bare plural (e.g. birds)
- c. その他限定詞 + 可算名詞 (e.g. many dogs, three cats)

(5a)には、具体的な指示対象を持つ存在読みとそれを持たない総称読みが存在する。存在読みでは、指示対象は話し手の中では特定化されているが、談話の構造上聞き手には特定されていない場合に用いられる (e.g. I bought a car)。これに対して総称読みの場合には、あるカテゴリーの成員を一つ恣意的に選び出すことによってその成員にそのカテゴリーを代表させている (e.g. A dog is a useful animal)。 (5b)の裸名詞句の場合には、成員間の属性を一般化することによってカテゴリー全体を表す表現になっており、還元すればカテゴリーの名前を指している (Carlson, 1980)。さらにこの特性から固有名詞に近い働きをすると論じられている。(5c)は数詞によって修飾されている名詞である。興味深いのは、(4a)の a + 単数名詞は語源的にはもともと one の弱形であるはずだが、現代英語では文法的に異なる振

る舞いを示す。

(7) a. A dog is a useful animal.

b. *One dog is a useful animal.

この違いは、a が弱形化していく過程で恣意的な意味である any の意味を形成した為総称表現としての読みを可能になり *useful animal* というカテゴリー全体の属性を表示することが可能なのに対し、One はあくまでも数詞としての意味を保持しているために全体からある一匹の犬をほかから切り離す機能を有しているにすぎず、*useful animal* との共起ができないと考えられる。

3.2. 時制

英語には二種類時制が存在し、現在形と過去形である。現在形は現在の出来事を指すこともあるが、多くが特定の時間に縛られない表現である。また過去形は本多 (2005) で挙げられている通り、出来事の起こった時間だけではなく、いつ知覚者がそれを認識するのかという所まで踏み込む。その為両方が特定の時間に縛られない読みを可能にしている。

3.3. 相

単純相 (完了相) は時制そのままを表し現在形の場合には特定の時間にとらわれない総称的な意味を持つが、進行相 (未完了相) は進行中のことを表すので必ず特定の時間、特に現在進行形の場合には発話時、に束縛される。

3.4. 形容詞

形容詞には、大きく分けて一時的な状態を表す形容詞 (e.g. *busy, happy*) である Stage-level predicate とやや恒常的な意味を表す形容詞 (e.g. *intelligent*) である Individual-level predicate が存在する。この違いは特定の時間や空間に縛られた状況を CPVC が表すことができるかに関して重要な区別になる。つまり、SLP は状況をもともと指すのに対し、ILP は状況に依存しない解釈となる。

4. 議論

ここでの議論は基本的に CPVC が categorical judgment であることの帰結として組み合わせの容

認性が決まるということを主張する。つまり、主語がどれほど論理的な主題として適切であるのかどうかということと、動詞句が叙述として適切であるのかということが基準となっている。Kuroda (1991) では、indefinite referential expression (IRE) は categorical judgment にはなり得ないとしている。IRE とは前節で紹介した特定化されていない存在読みのことである。しかしだからといって形式上の不定主語がすべて非文になる訳ではない。実際には総称読みであれば、すでに話しては抽象的な概念として特定化しており、その意味では主題となり得るからである。このことを実際のデータで見ていく。

4.1. 不定主語+単純時制

不定主語+単純時制の形はもっとも典型的な属性文である為、状態動詞だと言われている CPVC 構文に現れる動詞ともよく接合する。つまり主語が属性表現可能であり、かつ動詞句が属性表現可能であるならば一貫性は保たれるはずである。実際に調べてみると属性表現として認可されうる a+単数可算名詞および裸名詞句の場合には基本的には CPVC は容認される。

(8) a. Cats look weak.

b. A soldier looks strong in a suit.

ただし、やはり存在読みの強い数詞を伴った主語に関しては容認性が落ちる。これはカテゴリー全体を表すための用法がこの主語には無いからだと言うことで説明できる。

(9) a. ?? Three men look busy.

b. ?? Three men look tall in uniform.

c. ?? Many men look busy.

過去形に関しては、現在形と同じ容認性を示した。それは過去形が過去に於けるあるものの認識という読みを可能にしているからであろう (本多, 2005) ある命題がいつ起こったのかというだけではなく、いつ認識したのかという解釈の意味論まで拡張すればこれは驚くようなことではない。加えて、過去や現在に於ける習慣や状態は属性の一部であるため

used to や these days を加えると容認性はさらにあがる。

(10) a. ?? Knives looked really sharp.

b. Knives used to look dull.

c. These days knives look really sharp.

この効果は視覚だけではなく、味覚はほかの感覚の場合にも有効であるため、CPVC という言語表現の問題であると考えられる。

(11) This brand of potato crisp used to taste awful, but now they are delicious.

全体として、categorical judgment であることからこのことは説明ができる。

4.2. 進行形と形容詞

先行研究では、CPVC における知覚動詞 (動詞句) は状態述語であると考えられているため、進行相 (進行形) とは相容れないと考えられてきた。そしてこれはある程度正しく、同じ主語で同じ時制であれば進行形の方が容認性は明らかに低い。

(12) a. Cats look weak.

b. ?? Cats are looking weak.

(13) a. ?? Three men looked tall in military uniform.

b. *Three men were looking in military uniform.

しかし、これは動詞だけで決められる問題ではなくむしろ補語を含めた動詞句全体で決めなければならない問題である。まず、一時的な状態を表す busy は容認性が高く、さらに興味深いことに進行形とそうでないものとの容認性が逆転する。

(14) a. ?? Three men look busy.

b. ? Three men are looking busy.

(15) a. ?? Many men look busy.

b. ? Many men are looking busy.

一人のインフォーマントは when などがつくとさらに容認性があがることと指摘している。ここで注記しておかなければならないことは、進行形に関して容認性があがるのは数詞が特に著しいということである。現段階では、まだ説得的な議論はできていな

いが、おそらく数詞の場合には存在読みが強いことに起因していると考えられる。つまりあるものが存在しているということと、進行中の出来事との間に親和性が見いだせるということだろう。それに対して、総称読みの場合には具体的に存在しない抽象的なカテゴリーを指しているために、それが進行形の表す出来事との存在と祖語を来しているのではないかと考えられる。さらに *tall* や *weak* などの恒常的な属性の場合には一時的に変化するということが考えにくい為に容認されにくい。

まとめると、属性を表すための総称読みと単純時制の組み合わせと不定の存在を表す存在読みと進行形の組み合わせの場合 CPVC の容認性が高い。これは一貫性の立場から考えると自然であり、ある要素がほかの要素とぶつかる時には容認性は下がる。特に属性表現の場合には典型的な *categorical judgment* の形であるため、この場合には総称表現としてカテゴリーという単一の指示対象が必要とされる。この場合機能の面から考えれば、定性を持つ主語と等価とはいえないまでも近しい機能を有しているため容認されやすい。

5. まとめ

5.1. 結論

本稿では、Kuroda (1991) の *Categorical judgment* という概念に基づき、不定主語を持つ CPVC の容認性を探った。不定主語、時制、相、形容詞という四つの要因に分けて調べた結果、二つの容認されうる軸が見つかった。一つは、総称読みの総称読みの可能な不定主語と単純時制の組み合わせであり、属性文の典型である。もう一つは不定の存在読みと進行形の組み合わせであり、これは一時的な状態を表す文である。抽象的で恒常的な属性と実際に起こっている一時的状態のどちらから文の要素がなっていれば容認性が高く、そして、要素間の対立が多くなればなるほど容認性が落ちていくと考えれば、容認性に段階性があることもうまく説明がつくと考えられる。

5.2. 今後の課題

現段階で解決すべき問題が二点ある。一つは存在読みの理論的な位置づけをどうするかということである。この場合の主語は明らかに IRE であり、*categorical judgment* とは食い違う。第二点は、インフォーマントへの質問である。CPVC はインフォーマント間の容認性の揺れが非常に大きい言語現象であることが明らかとなった。ある母語話者が容認できるとしたのも別の母語話者が全く容認できないとした例文もあった。特に進行形に関してはかなり容認できる場合と、進行形であることを理由にほとんどをはじめてしまった場合があった。なぜこのような違いが出るのかを明らかにし、より文脈を特定化した上での質問が必要であると考えられる。

6. 参考文献

- Carlson, G. 1980. *Reference to kinds in English*. New York: Garland.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論 — 生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会
- Jackendoff, R. 2007. *Language, consciousness, culture: essays on mental structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 今野 弘章 (2009) 「中間構文の『総称性』再考」, 『日本英語学会第 26 回大会研究発表論文集 (JELS 26)』. 121-130.
- Kuroda, S. 1991. *Japanese syntax and semantics: collected papers*. Dordrecht ; Boston : Kluwer Academic Publishers.
- Rogers, Andy. 1972. Another look at flip perception verbs. *CLS* 8. 302-315.
- Rosebaum, P. 1972. *The grammar of English predicate complement constructions*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房
- 連絡先 : fumi3648@gmail.com